

アイヌ民族の始祖神

アイヌ民族の各家庭には、その家の元祖として代々伝えられていた始祖神（氏神）がありました。興味深いことに、この始祖神は人間ではなく陸獣・海獣・鳥類・魚類・昆虫・植物、



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレイ国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレイ校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

自然現象などで、例えば熊や狼、オオワシやオジロワシ、シャチや雷などです。なぜこのような人間以外の生物が始祖なのかについては様々な伝説があります。アイヌ社会では、人が製作した品であれ、どんなに小さな生物であれ、この世に存在するありとあらゆるものが人間を越えた力を持つカムイ（神）とされていました。なぜなら、人はそれになりきる能力が全く欠落しているからです。

各家では、そのカムイたちが善良な人間に惚れ込んで、その人と結婚し、男女2組4人の子どもをもうけ、その一対は天界に昇天して神の子孫となり、もう一対はこの世に残って他者と婚姻し、その子孫が、現在の我々なのであると語り伝えられていたのです。男神が神の世界で似合いの伴侶を見つけることができず、止むなく人間世界に目を向け、そこに素敵な女性を見つけて結ばれるという話が一般的ですが、その逆もあって、この神が各家庭、あるいは同じ地域に住む一族の始祖神となる訳です。

例えば、日高地方の幌尻岳^{ポロシリだけ}の熊神（キムンカムイ:kim山 un 棲む kamuy 神）が麓の村に住む娘の夫となり、子どもが生まれ、その子孫といわれる一族についてのお話が知られています。ある時、幌尻岳の主である熊神の息子が人間の若者の姿になって、アイヌの村のある家を訪ね、一夜の宿を乞いました。この若者は大層立派な様子で、狩りも巧みであったため、その家の主人は、娘の婿になって欲しいと頼みます。娘もこの若者を憎からず思っていたので、二人は夫婦となりました。

た。やがて、二男、二女の子宝にも恵まれ6年が過ぎた頃、夫は妻に、実は自分は幌尻岳の熊神の息子であり、父親が病気になったため山に戻らなければならなくなると告げま

す。夫は、長女と長男と一緒に連れて行くけれども、次女と次男は妻のところに残すことにしました。自分は長女を見て妻を想うことにするから、妻には次男を見て自分を思い出して欲しいと告げて家を出て行ったそうです。そして、妻のところで人間として育った次女と次男の子孫にあたる一族の者が幌尻岳で熊に遭遇したときは、熊に向かって「自分は幌尻岳の主の子孫なので、他人と思わないでください」と言うと、熊は向きを変えて去ってゆくといわれています。これに似た話は樺太・千島・北海道の各地に存在します。山の主も、山ごとに形容や遺伝子が違うため、熊神を始祖神とする一族がいくつ存在しても、各々は全く異なっているのです。アイヌ民族の家庭には独自の紋章があり、始祖神が同じ一族であれば紋章も共通しています。明治の末くらいまでに生まれたアイヌの人々は、自分たちの始祖神が何であるかを知っていました。その頃は、一家相伝とされ他人には語られなかった始祖神にまつわる長い話が沢山あったそうですが、今に至るまで継承している家は数少ないということです。

日本の民話にも人間に助けられた鶴、蛇、猿、犬など様々な生き物が姿を変えて人間と婚姻したという異類婚の話が沢山あり、古事記やギリシャ神話にも、神様が人間の娘を妻にしたという伝説があります。人間は元はといえば、粒状の有機体から様々な生き物を経て進化してきたわけですから、アイヌの人々の始祖神がヒグマやシャチであったとしても全く荒唐無稽な話であるとも言えないのではないのでしょうか。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部（滝川市）で開催のベカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007、2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～9』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。